

2009年10月2日

前田高行

(注)本稿はブログ「石油の内外情報を読み解く」に2回にわたって連載した記事をまとめたものです。

「OPECの暗雲：減産に同調しないロシア」

9月9日、オーストリアのウィーンで第154回OPEC総会が開かれ、昨年12月総会で決議された生産枠を維持することとなった。8月以降WTI原油価格は60ドル台後半、時として70ドルを超える状況にあり、OPEC加盟国はこの価格水準にほぼ満足している。一方需要は米国、中国で景気回復の兆しが見られるものの、その他の欧米、日本、アジア新興工業国などは依然不透明である。

原油を減産するべきか、はたまた増産するべきか、OPEC加盟国に迷いが見られた結果が今回の現状維持の決定に至ったと考えられる。一方、そのようなOPECを尻目にロシアは大幅な増産を行っており、今やサウジアラビアを上回る世界の生産量を誇っている。ロシアはこれまでOPEC総会にオブザーバーとして出席し、少なくともOPECの決定を尊重する姿勢を示していたが、今では自国の増産について「OPECに謝罪する必要は無い」とまで発言している。

1. 第154回OPEC総会で生産枠維持を決定

9月9日、ウィーンのOPEC本部で第154回OPEC総会が開催された。加盟12カ国の石油相が集まり(但しベネズエラは石油相がチャベス大統領のロシア訪問に随行したため代理出席)、アンゴラのバスコンテロス石油相を議長に現行生産枠の当否について議論が交わされた。因みにOPEC加盟国は昨年未だにインドネシアが脱退しており、アルジェリア、アンゴラ、エクアドル、イラン、イラク、クウェイト、リビア、ナイジェリア、カタール、サウジアラビア、UAE及びベネズエラの12カ国で構成されている。

現在のOPEC生産枠は昨年12月の第151回総会で決定されたものであるが、これは同年9月の加盟12カ国の実生産量のうちイラクの生産量(221万B/D)を除く2,905万B/Dを420万B/D削減(14.5%)し、11カ国の生産枠を2,485万B/Dとするものであった。この結果、今年1月1日以降の各国生産枠は大きい順に並べると、サウジアラビア(8,065千B/D、以下同じ)、イラン(3,342)、UAE(2,228)、クウェイト(2,227)、ベネズエラ(1,990)、ナイジェリア(1,677)、アンゴラ(1,484)、リビア(1,471)、アルジェリア(1,205)、カタール(732)、エクアドル(425)となっている¹。

2008年は原油価格が史上まれに見る乱高下となり、それにつれてOPECの生産枠も大きく変動した年であった。年初にバレル当たり100ドルを突破した原油価格(WTI原油)は、その後も急

激に上昇、7月には遂に史上最高の147ドルに達した。しかし9月にリーマン・ショックにより世界の金融市場が100年に一度といわれる危機に見舞われると、原油価格も秋の陽のつるべ落としのごとく急落、年末には遂に30ドル前半に落ち込んだのである（上図参照）。

OPECは9月及び11月の総会で急落する価格に対して生産量削減を打ち出した。価格が急上昇しつつあった2007年12月に開かれた総会で2,967万B/Dに設定された生産枠(インドネシアを含む)は、2008年9月の総会で90万B/d減の28,800千B/Dに、さらに11月総会では150万B/D減の2,730万B/Dに削減された。

それでも2008年末の価格はピーク時の147ドルから30ドル前半まで急落したため、12月総会では遂に、9月の実生産量をベースに420万B/Dを削減し、OPEC11カ国の割当総量を2,485万B/Dとしたのである。従来OPECの各国別生産割当量は常にその直前の割当量を元に均等な割合で増減されていたのであるが、今回初めて9月の実生産量を新割当量の算定ベースにしたのである。これは従来のやり方を見直した大きな転換点であったと言えよう。リーマン・ショックが未だ需給に反映されていない9月の実生産量は、イランやベネズエラのような生産余力の乏しい国にとっては生産量のピークを示していたと言えよう。潜在的な生産余力を持つサウジアラビア、UAEなどとは事情が異なっていたのである。12月総会でイランやベネズエラなどのOPEC強硬派が大幅削減に反対しなかったのはそのためと考えられる。

そしてこの生産枠は2009年2月の152回総会から今回の154回総会まで維持されたのである。この削減が功を奏し、原油価格は09年年初から徐々に回復し、3月には40ドル台、5月には50ドル台を回復、6月以降はOPEC加盟国の多くが満足な価格水準と考える60~70ドル台を維持している。

2. タナボタのロシア

OPEC総会の二日後、ロイター通信モスクワ支局から一つのニュースが流れた。ニュースのタイトルは「増産についてロシアはOPECに謝罪(apologies)の必要は無い」という刺激的なものであり、OPECが生産制限を続ける中で、同国の8月の月間平均生産量は史上最高の997万B/Dに達したことを伝えた。そこにはセルゲイ・シュマトコ石油相の「わが国はOPECに何ら義務は負っていないし、何の約束をしたこともない」という談話が添えられていた。

確かにOPECメンバーではないロシアは生産削減に同調する必要は無い。しかしロシアは昨年12月及び今年3月のOPEC総会にオブザーバーとして参加しており、原油価格引き上げのために同じ生産者としてOPECが苦闘している様子を見ている。と同時にこれまでのロシアの言動を振り返ると、減産に対する確約はしないまでも、リップサービスの「口約束」をしていることは紛れも無い事実である。昨年12月のOPEC総会にはロシアの石油相がオブザーバーとしてアゼルバイジャン、オマーン、シリアと共に出席している²。

ロシアはこの総会にプーチン首相の腹心でエネルギーの最高責任者イゴール・セイチン副首相を始め、同国二大石油企業Rosneft及びLukoilのトップという超重量級のミッションを派遣する

と言明（実際の出席者は不明）、しかも Lukoil の CEO は OPEC 総会で自国が 20-30 万 B/D の生産削減を提案する可能性すら示唆したのである。この時点でのロシアの生産量はすでに 1 千万 B/D に達していたと見られる（但し輸出量は 4 百万 B/D 以下だった模様）³。

12 月総会では同年 9 月の OPEC 各国の実生産量合計 2,905 万 B/D を 420 万 B/D 減産して 2,485B/D とする決定を行なった。このときロシアと共にオブザーバーとして参加していたアゼルバイジャンは、同国が生産能力 100 万 B/D に対し既に 84 万 B/D に落ちている生産量をさらに 54 万 B/D まで下げると言明した。これに対して会議に同席したロシアは自国の態度を明らかにしなかった⁴。

ロシアは続く 3 月の OPEC 総会にもオブザーバー参加している。出席したイゴール・セイチン 副首相は、1-2 月のロシアの石油生産は 1.9% 下落しており、輸出を削減することになる、と説明したが、具体的なコミットは避けている⁵。そしてロシア石油相は 9 月総会を控えた 8 月末、OPEC メンバーをモスクワに招き会議を開きたいと 6 月に OPEC 側に提案したことを明らかにしている⁶。このモスクワ会議が 9 月に予定されていた OPEC 総会を意味するものか、或いはそれとは異なる生産国同士の対話であるかは明らかでない。これら一連のロシアの言動により OPEC はロシアが共同歩調を取るといったシグナルを送っているとの印象を受けたに違いない。

しかしロシアは昨年 12 月以降 OPEC の期待をことごとく裏切り、それどころかサウジアラビアを上回る 1 千万 B/D 近くの世界最高の生産水準を続けている。原油価格はこの間、OPEC の減産が奏功し、年初の 30 ドル台から 70 ドル前後にまで回復した。これによってタナボタの利益を得たのが誰であり、割を食ったのが誰であるかは明らかであろう。特に OPEC 最大の生産国であるサウジアラビアの逸失利益は莫大である。ロシア石油相は今年第二四半期の生産量は 740 万 B/D、8 月は 997 万 B/D で前年同月比 1.3% 増であり、輸出もこの間に 5.9% 伸びたと述べている。3 月の OPEC 総会での説明とは全く逆の結果を示している。これに対して減産協定を忠実に守ったサウジアラビアの輸出量は 739 万 B/D から 700 万 B/D 程度まで落ちているのである。

専門家はロシアが得たタナボタ利益は 200 億ドルに達し、一方サウジアラビアの年間逸失利益は 1 千億ドル、GDP のほぼ 25% に達すると推算している⁷。OPEC としてはロシアの身勝手さに憤懣やるかたない思いであろう。9 月総会後の記者会見でバドリ事務総長は、生産削減に対してロシアから目に見える形の協力が得られなかったからと言って落胆しているわけではない、と述べた⁸。しかしそのとき記者団はバドリ事務総長がフラストレーション一杯の表情であったことを見逃さなかった。「落胆していない」という彼の発言は、名指しで相手国を非難すること避け、精一杯の強がりを見せる外交官特有の態度だと評している⁹。

蛇足ではあるが 9 月総会に出席したのは OPEC メンバーだけであり、ロシアはオブザーバー参加していない。オブザーバー参加を招請するのは会議主催者の OPEC であり、ロシア側から押しかけることはありえない。したがってロシアが参加しなかったのは、OPEC が当初からロシアの非協力的態度に嫌気をさしてロシアに声をかけなかったのであろうか。それとも OPEC から誘いはあったものの、ロシア自身が 6 月に今秋のモスクワ会議開催を OPEC に提案していることから、

間の悪くなったロシアが逃げたのかもしれない。冒頭に述べたようにロシアが「OPEC に誤る必要はない」と述べた趣旨は案外ロシアの開き直りなのかもしれないが、真相は闇の中である。

もう一つ蛇足を加えるとすればベネズエラの動向である。今回の総会でベネズエラは石油相が欠席し代理を送り込んだ。同じ時期にチャベス大統領がロシアを訪問し、石油相は随行を命じられたから、と言うのがその理由である。しかし石油相が OPEC 総会よりも大統領随行を優先したことは本末転倒とも言え、そもそもこの時期にチャベス大統領がロシアを訪問すること自体がサウジアラビアなど OPEC 穏健派に対するあてつけとすら考えられるのである。12 月総会の減産決定後、OPEC 加盟国はほぼ減産幅を遵守し、その結果価格は 70 ドル前後まで回復した。しかし最近では加盟国に抜け駆けの増産をする国が絶えないようであり、Bloomberg によれば 3-4 月に 80% であった遵守率は最近では 71% に落ちており抜け駆けの増産に走る国が少なくないようである。その筆頭格がベネズエラと言われる。OPEC の中でベネズエラは常に高価格を求める強硬派であるが、価格が高くなると一方的に自国の割り当て量を破る常習犯でもある。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行

〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601

Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642

E-mail; maedat@r6.dion.ne.jp

¹ MEES on 22-29, Dec., 2008 より

² OPEC Press Release, '151st (Extraordinary) Meeting of the OPEC Conference'

³ Gulf Times on 2008/12/16, 'Russia sending the high-level delegation'

⁴ Gulf Times on 2008/12/18, 'Azerbaijan offers oil cut: Russia makes no pledge'

⁵ Gulf Times on 2009/3/16, 'OPEC maintain present production levels'

⁶ Gulf Times on 2009/8/28, 'Russia plans autumn Opec meeting in Moscow'

⁷ Arab News on 2009/9/20, 'Russian bear vs. OPEC: A battle of wits!'

⁸ Gulf Times on 2009/9/12, 'No apologies on oil output hike: Russia'

⁹ Arab News on 2009/9/20, 'Russian bear vs. OPEC: A battle of wits!'